

原発事故と関わったコープふくしまの記録を残したい

「福島第一原子力発電所の事故は、世界的な問題ですが、生協の中ではコープふくしましか関われない問題があります」と、コープふくしま野中俊吉専務理事は言います。「私達が自分の事として考えて取り組んだことを皆に感じてもらいたいです。この体験を組合員さん達が自分の言葉で臨場感を持って語れるようにしたい。テレビでは決して見られない、原発事故で組合員さんや生産者にどんな事があったかを記録し、津波と原発事故の記録を残しておきたい」と言う専務理事の強い要望で、事故を起こした原発の30km圏外の組合員さんの様子と野菜などを供給する生産者の方々を訪ね、お話をうかがいました。



作付けを断念した飯館村の生産者

コープふくしまの組合員に産直で野菜を供給している農家の放射能被害は、相当深刻なものになっています。30km圏外ですが、高い放射能汚染が観測されている飯館村飯樋で、コープふくしまの産直グループ生産部会長をしている鈴木秀範さんは（写真上、作付けを断念したワサビの苗を手にしている鈴木さん）、今年の作付けを4月12日に断念したと述べています。3月上旬はレタスの種まきをする時期ですが、3月12日の原発の爆発以来、農作業を始めるか迷い見合わせていました。3月25日に水道水から950/ベクレルのヨウ素131が検出（制限指標値は300ベクレル）されたのを機に、もう作付けはできないと思ったと述べています。その後、地域40カ所の土壌の放射能のサンプリング測定でセシウム137が5万ベクレル/kg以上のところもあって、地域全体で米などを作らないことにしたと述べています。

そしていま、鈴木さんの住む地域では、高いレベルの放射能汚染のため計画避難地域に指定される可能性が高まってきました。指定されると1ヶ月以内の避難が指示されます。こうした事態に、損害賠償や早く農業が再開できるように放射能を除去するなどの対策をとるように国や東京電力に対する要望を地域で話し合っているところだと言います。



4月半ばにも時々雪が降る飯館村の農業地帯。放射能レベルは3.7マイクロシーベルトを示している。



農産物の出荷が制限されている二本松市の東和地区の放射能は1マイクロシーベルト前後と比較的低かった。



早期出荷をめざして栽培途中だったが出荷できなくなってそのままにしてあるカブ（右）と売れなくなった苗を示す佐藤さん。

有機農法を破壊した土壌の放射能汚染

二本松市のNPO法人「ゆうきの里東和」で野菜作りをしている佐藤佐一さんは、コープふくしまや千葉県が生協などに産直野菜と野菜の苗を出荷していました。原発事故後、国の指示で福島県内産の野菜の出荷規制が始まり、ハウス栽培の小松菜やほうれん草の出荷が放射能汚染のためにできなくなりました。出荷せず残った野菜はこれまでは、土壌に鋤込んで土と混ぜ肥料にしていました。が、「放射能が土に混じるので、野菜は刈り取って保管するよう指示が出たんです。自然の循環を利用する有機農法ができなくなってしまいました。損害補償のために栽培の様子と保管状態を写真に撮るようにしています」と佐藤さんは言います。

また、4月12日に県が土壌測定を行い、セシウム137が5000ベクレル/kg以下なら作付けしてもいいことになりました。ところが、出荷時の野菜の制限値は500ベクレル/kgですから、作ってもそれを上回っていたら売ることができません。「その場合にも損害を補償してくれるのか確かなことは全くわかっていないんです。農地は作付けしないで放置すると雑草がはえて荒れてしまいます。わたしたち生産者は、売れる保証がないので、今、野菜を作っているのかどうか迷い、大変な不安の中にあるんです」と佐藤さんは憤る。

また、佐藤さんのハウスでは、ちょうど家庭菜園向けの野菜の苗の出荷時期を迎えていました。苗の放射能汚染に関する出荷規制はないので販売できるのですが、これがさっぱり売れなくなったのです。この地方の家庭菜園の規模は都会と違って大きく、自家消費分の野菜は自分の畑で作るといいます。放射能汚染の広がりの中で、野菜の栽培をあきらめた人達が多いようです。原発事故の被害は相当な深刻さと大小さまざまなダメージを、さまざまな分野に及ぼしていることが生産者の言葉の端々からうかがうことができます。